

構造的に働きかけるスクールソーシャルワーカーのプロセス

○ 大阪府立大学大学院博士後期課程 荷出 翠 (008923)

キーワード：スクールソーシャルワーク、家族システム、学校システム

1. 研究目的

近年、不登校やいじめ、非行など子どもを取り巻く多くの問題が取り上げられている。子どもの問題は家族システム、学校システムの課題が複雑に絡み合っていることが多く、すべての子どもが通う学校現場において家族と同じように学校を扱う意義は大きく、双方にソーシャルワーカー（以下「SW」という。）が働きかけることは重要であると考えられる。

そこで、スクールソーシャルワーカー（以下「SSW」という。）が家族と学校に焦点をあて、子どもの問題が解決するプロセスを明らかにし、構造的な視点で家族と学校の双方へアプローチすることによって、子どもの困難な状況を救い、早期の問題解決や再発の防止に繋がることを実証する。SSWの考え方や視点についてインタビューを行い、悪循環に陥らないアプローチの方法を探ることを目的とし、それにはどのようなプロセスが必要であるかを考察する。

2. 研究の視点および方法

2017年6月～2019年3月の期間、構造的な視点を持ち、実践を行っているSSW8名にインタビュー調査（半構造化面接）を実施した。主な質問は、①学校、家族と関係性を築くために誰にどのように働きかけたか、②困難ケースにおいて、家族や学校のどこに着目し、どのように働きかけていったか、③解決に至ったと思われるポイントについてなど、の3点に集約した。MAXQDA 11（Release 11.11）を用いて佐藤（2008）の質的データ分析法にて分析を行なった。

3. 倫理的配慮

大阪府立大学人間社会学研究科社会福祉学専攻内研究倫理委員会の承認を得ている。具体的には、研究の目的・趣旨を伝え、調査への協力は任意であり、途中で辞退も可能であること、その際に一切の不利益がないことを説明した。また、調査から得られた個人情報には特定できないように匿名化し、研究以外の目的にはデータを使用しないことなどのプライバシーの保護についての配慮を説明し、同意を得た。

4. 研究結果

- ①「SSW の中立性」：家族や学校の＜一員になり＞、それぞれのペースに合わせるということが多く、障がいなどクライアントが語りにくいことについてはソーシャルワークの価値を基盤に率直に質問を投げかけるということが語られた。さらに家族間、学校間、家族と学校を繋げるために＜大げさに代弁する＞という概念が得られた。
- ②「情報を整理する」：ケースの問題を誰が担っていく必要があるか、誰が担うと大きく変化していくのか、何に誰が一番困っていて何がしんどいのか、といった＜担当を分ける＞、＜優先順位を整理する＞概念が抽出された。
- ③「味方や味方でない人をわける」：学校のストレングスをいち早く見つけるという語りが多く SSW に対して批判的な人でなく、協力してもらえそうな人から入り込んでいき、味方か味方でないかというのは同じ福祉的な視点、感覚に近い人とまず協働していくということが多かった。
- ④「小さな目標を一緒に立てる」：小さな目標を子ども、家族、学校と一緒に立てる。SSW も一緒に自らの目標を立てることが行われていた。また、＜学校と家族が同じ目標を共有する＞といった同じ方向を向くように目標を双方に伝えていくことも出された。
- ⑤「解決を確約する」：、ゴールがイメージできるような質問を投げかけ、＜見通しを伝える＞（完成図のイメージ）概念が得られた。

5. 考察

困難事例においては家族成員間、教職員間、家族と教職員間の境界線が太いことが分かった。その境界線をつなげるための SSW による家族システムへの関わりと学校システムへの関わりはほとんど同じであった。困難事例において SSW は学校と家族を常に通訳するような働きかけを行なっている。たとえば、子ども、家族、学校の思いをそれぞれに代弁するという機能が多く用いられていた。また、一つひとつの情報を子どもや家族、学校と一緒に丁寧に整理し、それぞれにどうなってほしいか、このようにすればこうなるでしょう、などの見通しを両者に伝えることが頻回に行なわれていた。方向性が見えなければ家族、学校は不安になるため、先のことをイメージしてもらえよう丁寧に伝え、共有することで安心感につながり、それが子どもに伝わるのではないかと考える。

SSW は学校の人間でもなければ教育委員会の人間でもないため、家族と学校それぞれの一員になりやすいといった長所がある。どこにでも入り込みやすいがそのためには SSW の役割など紹介の仕方や方法などにも配慮する必要がある。

【参考文献】 佐藤郁哉（2008）質的データ分析法-原理・方法・実践. 新曜社